

# 情報と謀略

全2巻

春日井邦夫 著

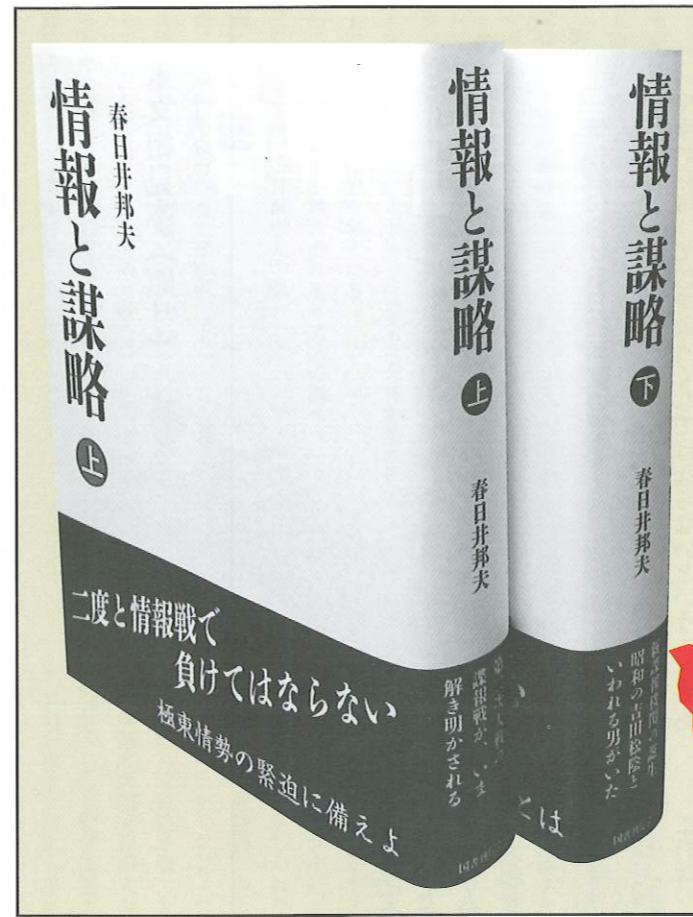
二〇一四年九月発行

国書刊行会

一度と  
情報戦で  
負けては  
ならない

著者22年の内調  
卒業の大著成る!

「情報」には謀略が秘められている。  
「裏のウラ」解説こそ、情報戦の核心である。  
精緻な情報処理と素早い対応なくして  
国家の安全や勝利はない。  
各国のインテリジェンスによる  
死闘の真相を明らかにし、  
その深淵と重要性を記す。



**紀** 元前一四〇〇年頃、イスラエルの指導者ヨシユアは、二人のスパイを送り出し、「エリコの町とその周辺を探れ」と命じた。二人は、エリコの町に入り、ラハブという遊女の家泊まった。  
ところが、エリコの王に、「今夜、イスラエルの何者かがこの辺りを探るために忍び込んで来ました」と告げる者がいた。官憲は遊女ラハブの家に行って来て言った。「お前のところに入り込んだ者を引き渡せ」……  
遊女ラハブは、「確かに二人のイスラエル人が来たが、城門がしまるところに出た。急げばきつと捕まえられる」と嘘をついた。これが文献に残るスパイの最古の記録である。それ以来、戦いのあるところには必ず諜報活動があり、スパイがいる。

謀報戦の死闘は  
どこまでも霧の中!!

■ 菊判・上製 上 472頁 定価：本体 9,000円＋税  
下 584頁 定価：本体 9,500円＋税

【仲小路彰著作 既刊】

## 世界戦争論

本体五、五〇〇円＋税

GHQが没収図書とした仲小路彰の世界戦史の復刻希書本。戦争学、戦争の世界史的発展、世界戦争の三部で構成する。戦場の中に歴史を読み、歴史の中に戦場を見るリアリストの秀作。解説西尾幹二。

## 第二次大戦 一九三六 前夜史

本体六、三〇〇円＋税

GHQ没収図書復刻。大戦前夜。英米の政治工作、秘密協定、時局の息詰まる駆け引きを明らかにする。二二六事件、スペインの内乱、スターリンの粛清等、大戦の足音が聞こえる。

## 第二次大戦 一九三七 前夜史

本体六、八〇〇円＋税

GHQ没収図書「一九三六」の続編。列強の軍備拡張、資源獲得の激化、中国共産党による抗日戦即時決行計画……等、第二次大戦を考える上で重要な事件がこの二年に起こっている。解説西尾幹二。

## 太平洋侵略史

本体各四、八〇〇円＋税

①～⑥  
本書は、欧米列強によるアジア・太平洋侵略に抗する日本の幕末史である。仲小路の著作は、戦前戦中、政治と軍の中核にいる人々に強い影響を及ぼした。GHQ没収図書。

## 未来学原論

本体四、七〇〇円＋税

仲小路彰は、帝大時代、井上哲次郎、姉崎正治、和辻哲郎らに天才と言われた。「未来学」「地球主義」という概念を使い、壮大な構想力で二十一世紀の日本の進路と世界の未来像を描いた奇跡の書。

帖合・書店印

発行 国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15  
電話 03-5970-7421 FAX 03-5970-7427  
http://www.kokusho.co.jp  
sales@kokusho.co.jp

注文書 情報と謀略 上 冊  
定価：本体 9,000円＋税 ISBN: 978-4-336-05856-0

情報と謀略 下 冊  
定価：本体 9,500円＋税 ISBN: 978-4-336-05857-7

推薦の  
言葉

## 情報の伝導師

日本文化大学学長  
元内閣情報調査室室長 大森 義夫

私は昭和四二年、沖縄に、警察庁から情報担当として駐在を命じられた。その時に内閣情報調査室から派遣されてきたのが春日井氏で、同氏の行動の端々に「本物の情報マン」の原型を見た。爾来、親しく付き合いを続けている。実に貴重な情報の伝導師といふべき存在だ。

一九八二年ころから、安全保障の専門誌に著者Xという匿名で「情報と謀略」は毎号掲載された。極めて緻密に書かれていたから、著者はよほど情報活動のプロに違いないと話題になり、我々の仲間内では「これを書けるのは彼しかいない」と定評になった。本書後半に著述されるように、春日井氏は「昭和の吉田松陰」「昭和の天才」とも評される仲小路彰氏に師事し、実践で鍛えられた人である。

春日井氏は、英米などの実際の事例を引用する形で、表面に出ない情報活動の凄み、歴史を衝き動かす隠れた秘密工作を現代に遺そうとしている。それはじつと、その世界をウォッチしてきた特異な人物だけが我々に伝えられる重層的なものの見方であり、歴史の真相を探知する手がかりというものだろう。

読者各位は本書の頁をめくっていくことで、インテリジェンスの世界に頭脳を侵されていくことになる。

著者の  
言葉

## 情報戦の重要性と 本書執筆の動機

著者 春日井邦夫

情報が「敵情を報知する」意味として用いられたのは、一八七六（明治九）年出版の酒井忠恕訳『仏国歩兵陣中要務実地演習軌典』が最初である。明治以降の国際化にともない、国内外の情報を収集・分析する情報活動の重要性が飛躍的に増した。利害を異にする各国の情報の素早い収集と、正しい解説にもとづく政治判断と国家戦略が国の存亡に直結するようになったからである。

特に通信や航空機、レーダーなどの発達にともなって情報の重要性が高まり、第二次大戦では各国の諜報機関が死闘を演じた。情報の優劣が戦局を劇的に転換し、勝敗を左右する原動力の一つとなったためである。では、わが国の情報活動は欧米列強に比較して、どのような成果をあげ、どのような敗北を喫したのであるか。情報戦の真相を理解し、二度と情報戦で負けてはならない——これが本書執筆の動機である。

もとより情報戦の核心は秘匿されやすく、容易に公開されないのが常である。私は関連資料や既発表の論述を丹念に調べ、その背後に隠されている各国諜報員の秘密活動を追って記述した。近時、わが国を取り巻く極東情勢が緊迫の度を増し、情報の重要性が増している。そのなかで「二度と情報戦で負けてはならない」と肝に銘じてきた私の思いが本書を通して幾分でも理解されるならば、著者としてこれに勝る喜びはない。

◆暗号解読の戦いこそ、情報戦の核心。ドイツの難攻不落を誇った「エニグマ暗号」も、日本の「紫（パープル）暗号」も、極秘裡に解読されていた……

◆暗号解読の影に、マタハリより凄腕の美人スパイ「シンシア」の大活躍が。

◆ルーズベルトを戦争に引き込むチャーチルの巧妙な情報操作。

◆見事に撤収した日本軍に驚嘆、昭和天皇の影響力に敬意を払うマッカーサー。

◆戦後に解消した国家情報組織と、仲小路彰の「新情報機関」の提唱。占領下に復活する「内閣総理大臣官房調査室」から「内閣調査室」への軌跡。

◆情報のプロが「二度と情報戦に負けてはならない」と、情報戦の真相を描く。

■本書は一九八二年より二〇一二年まで防衛関連情報月刊誌に、「X」の仮名で連載した「情報と謀略」をまとめたものである。

### 主要目次

#### 上巻 第1章 暗号機エニグマをめぐる謀略

- チャーチルとイントレピッド作戦
- 暗号機エニグマを奪取し解読せよ
- 英SDが壊滅に瀕したフェンロー事件
- 戦争の発端は謀略事件から始まる
- 英米首脳の極秘交信を暴露したタイラー・G・ケント事件
- ルーズベルトの腹心ドノヴァン
- 暗号解読作業「ウルトラ」と「マジック」が米英同盟を緊密に
- コペンハーゲン市民の見殺しが「真珠湾謀略」の原型か
- 昭和十六年三月 米英軍事協力の基本ABC—1計画完了
- イントレピッドの対日情報工作
- ワイズマンのヴィーデマン工作
- 貴重な情報傍受基地バーミューダ
- FBI長官二重スパイを信用せず
- アメリカの攻撃的情報基地「キャンブX」の設置
- 勝利計画を漏洩してヒトラーを対米宣戦に引き込む
- ドノヴァン戦略情報局(OSS) 長官就任
- 「蛮男」ドノヴァンの論理
- 英仏関係は同盟から敵対関係へ
- イントレピッドの心理戦争
- 魅惑的なスパイ・シンシア
- 赤軍情報部の創始者ベルジン
- ベルジンに信頼されたゾルゲが来日
- 二二六事件分析で高い評価のゾルゲ、尾崎そして近衛内閣
- 血の粛清を覚悟したベルジン情報部長の遺言
- トレッベルの対ドイツ諜報網
- ドイツの対ソ戦争準備を確認
- ドイツ情報機関の威信をかけた闘い
- 裏切ったスパイと自殺したスパイ
- 逮捕された赤いオーケストラの中枢部
- 独ソ和平に協力せよ！トレッベルに選択を迫るゲシュタポ
- ゲシュタポとの知的ゲーム
- ボルマン、グラン・ジュー作戦でスターリンとの和解を追求
- 重なる敗北、SS内部に芽生えたヒトラーへの強い疑念



暗号機エニグマ

- 「黒いオーケストラ」の悲劇―反ヒトラー運動はなぜ失敗したか
- 中立国スイスにおけるソ連情報組織「ルーシー」の謎
- 各国情報機関が入り乱れるスイス
- イギリス、Z機関と「赤いオーケストラ」との接触
- ユダヤ人絶滅の総責任者ハイドリヒ暗殺
- 暗殺の復讐でチェコ人千三百人を射殺
- 「大粛清」を捏造させたハイドリヒのスターリン工作

## 第2章 ゴルゲ・尾崎の密議

- ドイツの反ナチ地下運動、ダレスの情報工作
- ダレス、フィルビー、反ヒトラー派
- 失敗したヒトラー抹殺計画
- 国防軍情報部とゲシュタポの戦い
- 「無条件降伏」の緩和を熱望も…失敗したヒトラー打倒計画
- スイス組織からウルトラ情報入手 スターリン圧倒的な勝利
- 英・スイス両情報部の親密な関係 SS保安部長スイスに圧力
- クルスク会戦大勝利でソ連への「ウルトラ」情報は終了
- ソ連スイス情報組織の崩壊
- かくしてバルバロッサ作戦は遅延された
- 英の独ソ離間謀略と信じ込むスターリンの大失敗
- 敵の敵は味方 スターリンとチャーチル、反ナチ統一戦線を宣言
- 独ソ開戦を信じないスターリンの誤判断
- ゾルゲ、逮捕前の打電―日本は北進せず南進してアメリカと戦う
- ゾルゲグループと尾崎グループの被逮捕者と判決
- 国外追放の夢も空し―祖国ソ連はゾルゲを見棄てた！
- 北アフリカ戦線の拡大と仲小路の焦慮
- 尾崎・ゾルゲの謀略に負けた松岡外相の訪独露外交
- 昭和一六年四月―富岡作戦課長と海軍第一委員会の役割
- ヒトラーのソ連攻撃を巡るゾルゲ・尾崎の密議
- 松岡は対米強硬論者ではない―独ソ開戦前夜の松岡外相と陸海軍
- 真珠湾攻撃の百日前に、ルーズベルトは日本本土爆撃に署名
- 三選が参戦に通じたルーズベルト大統領の戦意満々
- 就任当初から持ち始めたルーズベルト大統領の対日戦決意

## 第3章 ナチス崩壊と「赤いオーケストラ」

- ヒトラーをいかに騙すか―ノルマンディー上陸作戦
- チャーチル―真実を守るために嘘というボディガードが必要
- 暗号解読で見抜いたヒトラーの大西洋防壁作戦
- 効き始めたボディガード計画
- ノルマンディー上陸作戦の成功
- 「ヒトラー暗殺の他なし」―「七二〇事件」
- 爆発はしたがヒトラーは死ななかった
- ドイツ西部戦線崩壊の危機
- ドイツ将兵を徹底抗戦に追いやった無条件降伏政策
- パリ解放寸前、共産党とドゴールの奪取闘争始まる
- アイゼンハワー総司令官に拒否されたドゴールのバリ占領計画
- 歓呼の嵐とともにドゴールがパリに入城
- パリ解放と「赤いオーケストラ」
- スターリンの責任に触れたトレツベルは禁固一五年
- 最後までヒトラーを迷走させたキケロ事件という謀略
- 「エニグマ」へのヒトラーの疑念
- 「歴史は必ず繰り返す」とヒトラー
- アルデンス攻勢の失敗
- ドイツ崩壊前夜の「赤いオーケストラ」とスイスグループの男たち
- 一九四四年秋からヤルタまで優位に立つスターリン
- ヤルタ会議の主導権はスターリンに
- ルーズベルトのスターリンへの異常な信頼、チャーチルの孤独
- 米英と和平交渉せよと迫る腹心ヴォルフ、ヒトラーは沈黙
- ドイツ側二人の政治犯を釈放―動き出したダレス機関
- サンライズ作戦に賭けるダレス ルーズベルトの急死
- 和平に賭けるヴォルフに「お前は運のいい男」とヒトラーが励ます
- 和平反対の司令官参謀長を逮捕―ヴォルフ独断の停戦通知
- 独裁者ヒトラー・ムッソリーニの最期
- ヒトラーと和平を断念―ヤルタ・コミニケに絶望
- ドイツ国防軍情報部長カナリスの最期
- ハンガリー・ユダヤ人との取引によるヒムラーの単独和平工作
- ユダヤ人を助けたヒムラーの主治医ケルステン
- スウェーデンからの和平使者
- ヒムラー、ゲーリングの官職剥奪そしてヒトラーの自決
- ヒムラー自殺とニュールンベルク裁判
- 終末にいたる一〇〇日工作の始まり
- 藤村中佐とD機関工作の発端
- ドイツ降伏の五月八日、トルーマンは日本に無条件降伏を勧告
- 書類は外務省へ廻した―藤村中佐への米内海相電

## 第5章 出遅れた日本の秘密戦対策

- 和戦の岐路支那事変の反省
- トラウトマン和平工作の開始
- 暴支膺懲と参謀本部戦争指導班の苦闘
- 今も近衛公の戦争責任が問われる理由
- 大本営政府連絡会議で和平条件の追加
- 戦争指導班の苦悩
- 国民政府を相手とせず
- 尾崎秀実の戦線拡大建言
- リュシコフ三等大将の越境亡命
- 赤いオーケストラ準備完了
- ゾルゲに対するモスクワ本部の猜疑心
- 国民精神文化研究所と小島威彦
- 参謀本部高嶋戦争指導班の終焉
- 宇垣外相はなぜ辞任したか
- 陸海軍の英米「可分」「不可分」論争
- 出遅れた陸軍の秘密戦対策
- 南進政策を説く尾崎秀実
- 新中央政権樹立を決意した汪兆銘
- 第二期謀略計画失敗の始終
- 汪兆銘との和平工作の発端
- 参謀本部二部による汪離反工作開始
- 入り乱れる対日和平工作
- 尾崎秀実の世界戦構想
- 近衛内閣の中核でスパイ活動
- 「異色ある風采」と記された思想家
- 仲小路彰を巡る昭和初期の思想家たち
- 同志仲小路と小島威彦
- 仲小路サロンに集う人々
- 平和を欲するならば戦争の研究を！



マタ=ハリ

- 仲小路の支那事変の洞察
- 高嶋中佐「百年戦争論」の真意
- 総力戦思想の機運高まる
- 仲小路の大胆な聖戦論
- 「戦争文化」の休刊
- 汪工作に踏み切った陸軍の失敗
- 汪兆銘に心服した影佐大佐の梅機関
- 不発に終わった天津租界謀略
- 日本政府の呆然自失と無力

## 第6章 日・米・英・ソ・中の情報戦

- 仲小路提唱の「日米不可侵条約」の締結
- 高宗武、日本との秘密交渉を暴露
- 戦文研、世界創造社に集う人々
- 「戦争文化」の発禁・休刊と「スメラ学塾」の構想
- 神戸のイギリス総領事館襲撃未遂事件
- 統帥権を巡る石原・高嶋会談
- イギリス艦の浅間丸臨検事件と反英運動
- 仲小路 ヒトラーの北欧、オランダ制圧と南太平洋争覇戦を予見
- 一体この男は何という人間か！
- スメラ学塾第一回講座開く
- 三浦環「永遠なる女性」の作詞作曲者仲小路
- 欧州戦争の急転と高嶋大佐
- 昭和一五年夏、高嶋大佐の東奔西走
- ヒトラーも同じ轍を踏むと論じる仲小路
- 対ソ連油断は禁物と高嶋大佐、建川ソ連大使赴任にケギをさす
- ロバート・キャバと遊んだ仲間達
- スメラ学塾と雄大なスメール文化論
- 汪兆銘政権樹立と蘭印進出
- 日米通商航海条約の廃棄の意味するもの
- 昭和塾とスメラ学塾の思想的な違い―東亜共同体論の誤謬
- 警視庁から要注意の小島威彦
- 宮崎正義・日滿財政経済研究会の運営資金
- 昭和一五年―仲小路グループの国家戦略
- 英米「可分」か「不可分」か
- 秘中の秘と伏された仲小路の一言
- 独ソ戦の危険を要路に訴えた昭和一六年二月の仲小路

## 第4章 原爆開発・実験・投下をめぐる謀略

- 戦争指導者に対する心理戦開始―ザカリアス大佐の登場
- ザカリアス大佐の日本語放送
- バッグ工作、小野寺工作もむなし
- 最高機密「原爆が作れる」と伝えたステイブンスン
- 米英合作の原爆開発に潜入したソ連スパイ
- 原爆研究の中核に滲透したフックス、GRUに情報を流す
- ドイツに原爆を作らせるな
- 原爆博士の理想主義とチャーチル
- ゾルゲを愛したソニヤ、フックスから原爆情報を受け取る
- 原爆資料ローゼンバーグ夫妻に感謝したスターリン
- 原爆製造のメッカ、ロスアラモス研究所
- Y計画の長にオッペンハイマーを任命
- オッペンハイマー博士はソ連のスパイか
- 「原爆製造に不可欠」オッペンハイマーをかばったグロブス
- アメリカ科学情報隊(ALSOS)の活躍
- 真夏の危機と革命的インブロージョン方式の成功
- 超空の要塞とアーノルド総司令官
- マリアナ諸島発進の第21爆撃兵団
- B29、ヒマラヤを越え中国へ
- 大陸打通作戦に脅威の蔣総統B29最初の目標は八幡製鉄所
- 昭和一九年六月一四日八幡製鉄所初爆撃
- ルメイ司令官の漢口焼夷弾爆撃
- B29の対日戦果拳がらず、マリアナに來た猛将ルメイ
- 3月10日の東京大空襲
- 大統領直結の「五〇九」部隊を編成
- テニアン基地で原爆の最終組み立て
- 模擬原爆の投下訓練
- テニアン基地の電波を傍受していた陸軍中央特種情報部第三課
- 原爆実験用地が死の旅に決定 暗号名トリニティの前進
- この世のものとも思われない―人類最初の核爆発実験
- 原爆実験成功の報告書がポツダムトルーマン大統領に届く
- 決定した十一月一日九州上陸作戦
- 完全に騙された日本の終戦外交ポツダム会議と対ソ交渉

## 第7章 戦争終結への情報と決断

- スメラ学塾の研究会活動
- 財団法人日本世界文化復興会の設立
- 仲小路の著書「世界興廃大戦史」「世界史話大成」の意味
- ヒトラーの対ソ戦決意を見誤った松岡外相の四国協商構想
- マスメディアの動向を注視して、独自の内外情報収集
- 仲小路グループの同志だった映画監督熊谷久虎と原節子
- 後藤象二郎の孫川添紫郎
- ハル・ノート直前のエピソード
- 雄大な仲小路の戦略構想
- 仲小路の同窓生宮下弘「特高の回想」とゾルゲ事件
- 「矢部日記」に見る末次大将擁立構想
- 東京帝国大学経済学部派閥闘争と小田村事件
- 情報局・陸海外各省支援の大イベントダ・ヴィンチ展開催決定
- 華麗なる仲小路グループの一員、建築家坂倉三三の活動
- ジャワ、ビルマ、フィリピンへ徴用された著名文化人
- アジア民族解放戦のモデル。ジャワ作戦軍宣伝班の顔ぶれ
- 二月八日の快哉と仲小路「戦争終末促進に関する腹案」
- 「米英の耐久力を警戒せよ」「諸戦の勝利に酔うな」
- 第二段作戦遂行途上の問題点日独共同作戦の食い違い
- 昭和一七年前半の圧倒的優位、好機逸した日独伊三国
- 昭和一七年三月九日、蘭印軍が今村第一六軍司令官に無条件降伏
- バンドン放送局で呼び掛けた第一六軍司令官布告第一号
- ダ・ヴィンチ展開催準備とドゥーリトル「東京空襲」
- ジャワ派遣軍宣伝班特別青年隊による青年訓練所
- 戦史に残る戦う宣伝隊
- ミッドウェー作戦の最中 大艦巨砲主義批判で小島威彦逮捕
- 東京空襲と山本五十六大将ミッドウェー海戦の大敗
- 大戦争中開催のダ・ヴィンチ展の盛儀
- 敗北の事実を隠蔽する海軍当局 小島威彦の釈放と仲小路の怯え
- 小島「檢拳」、中野「反東条」、ゾルゲ事件など仲小路の大厄
- 昭和一七年二月東条、木戸に指示された天皇の戦争終結への意思
- 勅令第五五六号「内閣委員」に任命された仲小路
- 仲小路「太平洋侵略史」
- 麻布竜土軒と仲小路グループ
- インド独立へ「剣には剣を」突如、東京に現れたボース

- 大東亜会議に参加できなかったスカルノに握手を求めた天皇
- 昭和十七年七月東条首相らの独伊特使派遣案の竜頭蛇尾
- 航空機と潜水艦による日独伊連絡
- 英空軍の猛爆下に曝され一苛烈な運命に耐えた伊29潜
- 敗色濃し中南太平洋の壊滅的戦局
- 一九九年二月仲小路スメラ学塾解散を通過
- スメラ学塾員生たちの運命
- 末次信正大将への高い評価
- 木戸新内大臣への最初のご下問「末次等の運動は発展性ありや」
- 末次等の排英運動と戦略
- 秘かに始めた戦争終結の研究
- スメラ学塾、遂に解散
- 『高木惣吉日記』に見る不発に終わった東条打倒工作
- 古賀連合艦隊司令長官遭難の悲報
- 「時すでに遅し」と嘆く高松宮
- 宮廷、陸海首脳部を震撼させたサイパン玉砕と和平への動き
- サイパン奪回「日途殆んどナク前途暗澹」
- サイパン陥落後に政局急展開
- 昭和天皇の「末次反対」
- 山中湖畔での末次・仲小路会談
- 散り散りになったスメラ学塾員
- 対ソ特使人事の混迷
- 富岡少将が見た内地の姿

第8章 終戦と進駐軍をめぐる情報と謀略

- 陸海バラバラの作戦計画と戦争能力の喪失
- 日本海軍の終末を告げる叩鐘。巨星末次大将急逝の意味
- 富士山麓山中湖畔に集う名士たち
- 昭和二〇年春、富士山麓に流れるピアノの調べ
- 昭和二〇年三月一日東京大空襲
- 終戦の大義名分は何か
- 一億玉砕は神州護持の道ではない
- 無条件降伏通告、本土決戦に追い詰められた日独
- ルーズベルトの死、ヒトラーの自殺
- ヨハンセン事件と高嶋東部軍参謀長
- 武官を誹謗する公使の極秘電
- パチカン・和平工作の顛末

- 足並み揃わぬ最高戦争指導会議
- 最高戦争指導会議「天皇「終戦促進」の意向明示
- 天皇の焦慮に内閣動かす
- ボツダム宣言受諾の聖断下る
- 天皇「私が国民に呼び掛けるのがよければマイクの前にも立とう」
- 真実の記録東部軍参謀長高嶋辰彦の手記
- 厚木航空隊反乱事件の顛末
- 八・一五以後仲小路を巡る動き
- ミズーリ艦上の降伏文書調印式とマッカーサー鶴岡八幡宮参拝
- 「皇統護持」九州の秘境に根拠地設営、帝国海軍最後の極秘任務
- 原爆・熱戦兵器研究に途を開いた伊藤庸二海軍技術大佐の先見性
- 敗戦と山中湖畔の大物たち。動することなき徳富蘇峰
- 宇垣一成「大命拜辞」の真相
- 東条首相の逆鱗に触れて悶々の田中隆吉と仲小路の出会い
- 山中湖畔で語り合った文化創造の夢
- 仲小路が提案した「国策慰安婦」
- 戦後復興の一番手、農工共同体への夢
- 高松宮の強い支持のもとに富岡定俊、史料調査会の設置
- 情報局廃局の愚行
- 吹きあれる「追放」の風のなかで
- 占領下に生き甲斐を求めて
- 高松宮と仲小路一門を結ぶ国体護持と国土復興
- 昭和二十一年年頭詔書「人間宣言」の深意
- 初めて仲小路を囲む門下生たちの感激
- 特権剥奪というGHQ指令徹底的に解体された皇室皇族財産
- 「元首」から「シンボル」へ急回転
- 光輪閣を貿易庁迎賓館に
- GHQ革命を日本が生まれ変わり復活するための試練と捉える
- 富士と対話する仲小路
- 天皇無罪論を崩しかねない東条発言の大波乱
- 舞踊詩劇「静物語」の上演
- 研究生にミケランジェロの協同を説く
- 仲小路「天皇訪米論」を提起
- 天皇皇后両陛下銀婚式奉祝園遊会と光輪倶楽部の設立
- 「日本に軍事基地を構築せよ」―朝鮮戦争勃発と仲小路提言
- 文明が戦争を防止しなければ戦争は文明を破壊する
- 欧州第一主義からアメリカは太平洋へ

- 鉄のカーテンと仲小路の世界平和提案
- 仲小路の口述「世界平和提言」
- 朝鮮戦争激闘のさなか「日本経営計画」刊行準備
- 朝鮮戦争勃発と高松宮の深憂
- 廣瀬淡窓咸宜園に因む山中湖畔三学荘の勉学生活
- 『日本経営計画』具体的実現に前進
- 天覧に供されることになった仲小路年頭文書と高松宮
- 上書の草稿を口述する仲小路「まさに天業恢弘の達成を」
- 光輪閣と生長の家
- 「聖徳太子会」設立と高松宮
- 太子会のヴィジョンは「日本祭」
- マッカーサー解任の日―聖徳太子の御忌一三三〇年高松宮の献詞
- 東条、石原莞爾とも会わず「黒子役」に徹した仲小路
- 自由を得た岩佐圭英「地球文化研究所」に参加
- 「けれども地球は動いている」を意議
- 「グローバリズム」の基礎となる「地球との対話」への途
- 日米首脳に宛てた秘密メモ 仲小路の予見を裏付けた朝鮮戦争勃発
- 米国立公文書館で発見ラスク特使に提出した秘密メモ
- 日米安保条約に関する日本の要望(要旨)―高松宮構想
- 安保大構想―往復文書に見るアメリカ国務省高官の重視
- 『地球との対話』に盛られた哲人仲小路の雄大な世界観
- 堂々と賠償に込めよ―賠償問題の創造的解決
- 水晶玉を覗くように―仲小路「一九五三年の地球的展望」
- 「日本の国連的定位置」仲小路の提唱
- スターリンの死―米ソ二大国の地球的対峙を凝視する仲小路
- 「新情報機関」設置の提唱―アジア人の深層心理に働き掛けよ
- 吉田茂に信頼された秘書官―内閣総理大臣官房調査室長村井順
- アジア太平洋を敵う覚悟のエネルギー米ソの世界支配と日本
- 戦争末期から吉田茂支持を取り続けた仲小路
- 助かった佐藤幹事長、吉田政権末期の難局と仲小路の激励
- 雑誌『新地球』創刊に見えた仲小路の編集キャリア
- 『新地球』巻頭言に漲る仲小路五四歳の意気込み
- 仲小路と富岡定俊少将の山中湖畔での語り
- 資料1「吾等斯ク信ス」とその経緯／資料2 仲小路彰略年譜

本文組見本(原寸)

1 チャーチルとイントレピッド作戦

情報戦における日独両国の敗北

日本にとって第二次大戦の最大の教訓は、再び「情報」で後れを取って国を危うくしてはならないということである。相変わらず、安全保障の論議は盛んだが、国の安全の最大の鍵が、なによりも「情報」にあることを指摘する声は、いまだにあまりにも少ない。「情報による敗北」の意味が戦勝国側から長く秘匿されてきたこと。従って敗北の実相が分からないまま、今後どう対応するかとらえようが、なくすにすぎないことによるものである。

こうした情報戦の真相は、歴史の謎となるに違いない。ただ時の経過がある程度明らかにした事実に基づき、想像の翼を羽ばたかせ、推理を重ね、再構成することによってようやく、全容に迫り得るものであろう。これは戦中・戦後といまなお秘かに戦われている全地球的な情報戦争についてと同じように言えることである。

恐らく第二次大戦中「諜報上の最大の成功は、一九三九

1 和戦の岐路「支那事変」の反省

年英国人によってなされたものだろう。この年に彼らは、工ニグマとして知られているナチスの最高レベルの暗号機を一台入手し、戦争の終結まで、ヒトラーと將軍間の連絡の大部分を連合国が傍受できるようにした。「一九四一年までに、アメリカ諜報員は日本最高レベルの軍事および外交の暗号を解読し、ついで日本大使館で使われていた複雑な暗号解読機の複製に成功した。」

これはリーダーズダイジェスト社の『20世紀/激動の記録』が明らかにしている英米両国の情報戦勝利の簡潔な要約である。(日本リーダーズダイジェスト社発行、一九七七(昭和五二年)一月四日第一刷)

このうち日本の暗号が解読されたことについては、アメリカの真珠湾責任者追及の査問委員会の記録等を通じて、戦後早くから知られていた。

ミッドウェーの敗北、山本連合艦隊司令長官の戦死等いづれも暗号解読によることが知られていた。

しかし、イギリスの工ニグマ解読については、長く秘密が保持されてきた。その概要が明らかになったのは、一九六〇年代のことであり、それも小出しに行われた。一九六二(昭和三七)年、キム・フィルビーのソ連への逃亡事件を契機にモントゴメリ・ハイドの『静かなカナダ人』(ア

一九三七年一月二日八日に真珠湾を攻とを余儀なくされたのは、直二七(昭和一二)年から始まった全面戦争の処理に失敗したの発端から「平和」を求めつと挫折を体験した事例は珍しの歴史そのものであった。六三(昭和六)年九月一八日、破を契機に「満州事変」が「日中戦争」と区別されるするやたちまち張学良軍州全域を占領し、一九三の独立を果たした。ま、塘沽停戦協定を国民軍の全振中指

政府と結び、中国州領内への復帰に中立地帯化が図なった。この満州して指揮・指導しそして六年後の一九三七(昭和北近郊の永定地から数発の射ラッパを吹くと部隊を移動したので、払戻反撃が日中戦争の発しかし、この金を引いたのか日本側だとい①西北軍閥説民政府の特務軍の全振中指